四倉新報

發行日二回　毎月一日　十五日
編輯兼發行人　小林庫三
福島縣石城郡四倉町中町四十一番地
發行所　四倉新報社
福島縣石城郡平町田町三十一番地
印刷所　一〇活版所
本紙定價一部拾錢　月貳拾錢（年二圓）

小作爭議の根本的解決策

小作法に關する特別機關

小作に關する特別機關は小さ事が必要である、又自作農地主にして小作を兼ね營作爭議の根本的解決策として欠く可からざるもので政府小作委員會に於ても此の設置と云ふ事に意見が纏つて居るのであるが、其の組織と權限に於ては論議の多い事と思ふ。

凡そ小作爭議發生の原因が奈邊にあるかと云ふに其の原因が小作料輕減要求に關するものが最も多いことは今日まで知りたる統計によつても知る處である。

故に小作料の問題が圓滿に解決される方法があれば、小作爭議を根絶せざるまでも著しく減少する事が出來ると思ふ。

故に新たに小作料に關する特別機關を設けこれによつて小作料の問題を決定する事が最大急務である。

其特別機を設置するとしてその組織及び權限については種々なる意見もあると思うが、先ず此の機關は地主及び小作人は最も公平でなければならいから、地主小作人の兩者から委員を出一方に偏せず公平の立場に一方に偏せず公平の立場に其の中で、その利害が あるものも委員の列に加へ更に政府から任命する委員の四種で組織する事が良策と思う。

其權限については、小作料に關する諸問題即ち小作料の決定、災害及び其他による一時的の小作料減免する程度の決定等も此機關に通じる事が策を得た事と思う

小作料有効期限についても原則的規定を設くる必用をうるもあるか此れは原則的に期限を規定せずも、小作料に關する特別機關に於て其地方の事情をし適宜に決定するが良策と思う（續く）

模範たる可き 草野の村勢

前代議士高岡唯一郎氏村長に戴き助役鈴木長壽氏は多年自治制に付研究し頭腦明敏の聲高き敏腕家で村務一切を掌理し村内切ての勤儉家で財政通である處の收入役大塲鈴太郎氏村會議員には猪狩金之助氏氏は溫厚長者の風格の持主で村治の巧勞者である又馬匹の改良に付研究せられつゝあると聞く他十名の村議諸氏も一意專心村務の爲盡力せられる本春村農會代議員十五名は北會津郡及び新潟縣に農事視察をとげられたと聞く草野村の概況本年七月現在民有地

田　五百〇九町〇段
畑　二百（八町段
宅地　四十一町四段
山林原野五百三十五町七段
生産物　五〇七、六九五
農産物　一二六、六八五
工産畜産
水産林産
豫算
歲入合計三萬七千九百廿五圓
歲出役場費四千五百六十二圓
同教育費二萬六千三百〇八圓
同其他七千〇五十五圓
人口戶數
現在戶數　七百八十七戶
現在人口　四千百七十七人
教育
尋常高等小學校　一
教育
分教場　十七學級
兒童數　七百九十一名

◆實說◆ 八百屋お七

芳月

（三）

朗かな冬の日さしを受けた廣椽の杜によりながら、美しい眼をうつとりと見開いたまゝ、何を思うとも無くじつと、兩の手を胸にあてゝ、むく〳〵として來た其乳房をじつと力强く押へる

その眼はしつとりと潤を持つて居るし、其唇は緋壯丹の開いたやうに紅く燃ゆるのであつた。

寺小性の、吉三郎の艶かしい姿を、ふと庭に垣間見たのはお七がそうして廣椽の柱に身をもたせながら、やるせない思いを兩手に托して、ふくよかな胸をじつと押ゑ押してゐた時であつた徒らに異性に對する、或る憧憬を有つて悶えてゐた、そのお七の戀が茲に美しい魅惑的な對象物を得て、火のやうに燃え盛つて行つたのも無理でなかつた。

美しい二人が顏を見合はせて上氣した其頰に微笑を見交すやうになつたのはそれから間のない事であつた。

× × ×

年が改まつて、天和二年の初春が來た。

それは太陽の爽かに照り添う、風のないほか〳〵とした或る日の正午下りであつた、お七は何時ものやうに暖かい日さしを受けて廣椽にぐつたりと身を置きながら、吉三の艶めかしい小姓姿を眼に浮べてゐた。燒きつくやうな其の美しい面影が、一刻もお七の眼から去らなかつた。

彼女は今も、その姿を繪でも描くやうに眼のなかで獨り自ら自由に抱いて樂しんで居た。

『お七樣』

優しい聲が、直ぐ袖垣のわきでした。

お七は驚いたやうに眼を其の聲の主へ注いだ。

其處には一刻も忘れ得ない吉三郎が立つて居た。

熱い血が頰に上つて、眼がうるんだ吉三郎も、美しい白いほうを上氣させながら耻しさうにお七を見て居るのであつた。

お七は、うつとりと其の姿を凝視した。

『あの私、刺をたてゝしまいました』

『まあ―』

お七は、初めて其の手を見た、片手の指を白い優しい手を痛たそうに握てゐる。

『此方へゐらつしやいま―』

とつて差上げませう』

お七は、立ち上ると急いで室へ入つて、毛拔きを取つて來た。

吉三郎は、もう椽のそばに佇んで恥しさうに仰向いてゐるのであつた。

女のやうに白い頸が美しく眺められた。

『お出し遊ばせ、どの指でございます』

さう云ひながら、寄りそうし、じつと吉三郎の手をとつた、溫かい男の肌のぬくみが、指先を傳はつてお七の全身にめぐつて行くやうに感じた。

乳房のあたりへ押しつけられた、吉三郎の肩の重みが、うつくやらな快さを胸の乳房のあたりへ覺ねさせた。

お七に覺ねさせた。

生れて初めて觸れた男女の身はおのずと快い輕るい震えにおのゝいた、どうしても止まらない、指先の震へに、なか〳〵刺は拔げなかつた。漸く拔いたが、其の少さな傷口から赤い血がはつりとにちみ出た。

『まあ―血が出ましたわ』

『いゝえ構ひません。有難うございました』

吉三郎はさう云つたが離れようとはしなかつた。

お七も、その指先きを握つた儘身をすり寄せてその指先から身體へ傳はる男のちみ出た男の血を眺めた。

ぬくみが、お七の燃ゆるような愛慾をつのらせた。

『まあ―まだ出てまいりますわ血が』

震ゐを帶びた上ずつた聲がお七の赤い唇から出た。

彼女はいきなり顏を伏せるとその火のやうな熱い唇を血のにちむ男の白い指先きにおしつけた。（つゞく）

洋酒類
藥品
四倉町新町
佐藤寫眞館
平町田町
電話五一〇

鮮魚商
政井要五郎
平町四丁目

鹽物鮮魚
委託問屋
伊藤彌兵衛

銘酒
四時川
醸造元
小野魯平
川部村小川

安すくて
味噌醬油
品の良い
洋酒罐詰
評判
の當店
イワサキ　磐崎屋支店
清酒
長生
小野信一郎
電話六六三